

性格行動特性と心身症様症状の関連性に関する研究
Down 症候群にみられる「退行」症状と行動特性の関連性の検討
(分担研究：小児心身症に関する研究)

宮本 信也

要約：これまでの小児心身症研究班の調査で明らかにされた心身症様症状と関連性が強いと考えられる小児の性格行動特性について、病理性の強い群を対象として再検討を行った。対象は、いわゆる『退行現象』が認められた Down 症候群児200名である。調査は調査用紙の郵送により行い、保護者に記入を依頼した。4 行動特性について検討を行ったが、2 特性（環境の変化に慣れにくい、環境の変化に対して回避的）が『退行』群で有意に多いという結果であった。また、1 特性（生活リズムが不規則）は有意差は認められなかったが、『退行』群で多い傾向が見られた。今回の結果は、心理的ストレス状態に対して適応障害を起こしやすい特性として、これまで小児心身症研究班で明らかしてきた性格行動特性の妥当性が高いことを示しているものと思われた。

見出し語：行動特性、心身症、Down 症候群、退行現象、妥当性

【はじめに】

これまでに、1995年度、1996年度の2年間にわたり、心身症様症状と関連性が推定される小児の性格行動特性について検討してきた。その検討により、小児の心身症様症状と関連性が強いと思われる性格行動特性が合計6項目抽出されている。それらは、①生活リズムが不規則、②変化・刺激に慣れにくい、③変化・刺激に対して回避的、④変化・刺激に対して敏感、⑤固執性、⑥気難しいである。

一方、こうした行動特性の検討は、一般幼児を対象に行われた。そのため、これらの特性が、実際の病的状態とも関連性があるものかどうか、そ

の妥当性に問題が残っていると考えられる。

そこで、今回は、上記行動特性が心理的ストレス状態に対する適応障害と実際に関連性があるかどうかを検討することで、この妥当性を検討することとした。

【対象と方法】

対象は、『退行現象』を認めた Down 症候群とした。退行現象とは、能力や活動水準の低下・性格の変化・神経学的な変化・心理行動面の問題が出現し、生活適応水準が急激に低下するものをいう。青年期 Down 症候群で比較的典型的に認められることが知られている。Down 症候群と退行現象を対象としたのは、対象の均一性が比較的得ら

れやすいと考えられたからである。

調査は、独自に作成した調査用紙を用いて行った。検討する行動特性としては、①生活リズムが不規則、②変化に慣れにくい、③変化に回避的、④固執性の4項目とした。調査用紙の記入は保護者に依頼し、郵送で送付・回収を行った。

【結果】

1) 対象者の概要

調査用紙発送数は330、回収数は202(回収率67.3%)であった。そのうち、有効回答数は200である。回答記入者は、母167名、父21名、父母8組、祖母1名、本人・父1組、不明2名であった。対象者の概要は表1に示す通りである。

表1 対象者の概要

年齢	男	女	計
15	5	6	11
16	11	7	18
17	10	10	20
18	11	6	17
19	6	12	18
20	11	7	18
21	7	5	12
22	12	10	22
23	4	8	12
24	8	7	15
25	13	18	31
26	3	2	5
不明	0	1	1
計	101	99	200

2) 退行現象の概要

『退行』現象が見られる、または過去に見られたとの回答は43名であり、全体の21.5%であった。

このうち、『退行』現象とは別の、明らかな身体疾患である甲状腺機能低下症による症状を呈している1名を除く42名(21.0%)を退行群、それ以外の『退行』現象が見られない者を非退行群とした。

表2に退行群の症状の概要を示す。

表2 症状ごとの人数

症 状	人 数
動作が緩慢	21
落ち込みがち、内に閉じこもりがち	18
発話減少、声が小さい	17
寝付きが悪い、眠れない	11
姿勢が前かがみ、小股歩行	10
すぐにいらいらしたり興奮する	9
頭痛、腹痛などを訴える	9
尿失禁	9
病院で診断された精神障害	8
食欲減退	5
その他	19

なお、全対象者の症状の平均数は0.69であり、標準偏差は1.72であった。退行群について、平均よりも2標準偏差以上多い4.13以上症状が見られたもの、すなわち5項目以上に回答があった場合を退行典型群、4項目以下のものを退行周辺群とした。退行典型群は12名で全体の6.0%、退行周辺群は30名であった。

3) 行動特性との関連

4つの行動特性と退行現象の関係について検討した。

①生活リズム

生活リズムについて、結果を表3に示す。退行

典型群で「不規則」が多い傾向が見られるが、有意差は認められなかった。

表3 生活リズム

	不規則ではない	不規則である
典型群	10 (83.3%)	2 (16.7%)
周辺群	29 (96.7%)	1 (3.3%)
非退行	140 (94.6%)	8 (5.4%)
計	179 (94.2%)	11 (5.8%)

②新しい環境への慣れやすさ

新しい環境にすぐに慣れるか、時間がかかるかについて結果を表4に示す。

表4 新しい環境

	慣れる	慣れにくい
典型群	4 (33.3%)	8 (66.7%)
周辺群	14(46.7%)	16 (53.3%)
非退行	116(76.8%)	35 (23.2%)
計	134(69.4%)	59 (30.6%)

すぐに慣れる・どちらともいえないと、時間がかかるの人数の偏りに関して χ^2 検定を行った結果、その差は有意であった($\chi^2(2)=18.58, p<.01$)。さらに、個々の2群間で χ^2 検定を行ったところ、退行典型群と退行周辺群では人数の偏りに有意な差は見られなかった。退行典型群と非退行では人数の偏りは有意であり($\chi^2(1)=8.70, p<.01$)、退行周辺群と非退行群でもその差は有意であった($\chi^2(1)=9.80, p<.01$)。

③環境の変化に対する反応性

環境の変化を嫌がるかどうかについて、結果を表5に示す。

表5 環境の変化

	嫌がらない	嫌がる
典型群	7 (58.3%)	5 (41.7%)
周辺群	22(73.3%)	8 (26.7%)
非退行	130(85.5%)	22 (14.5%)
計	159(82.0%)	35 (18.0%)

嫌がらない・どちらともいえないと、嫌がるの人数の偏りに関して χ^2 検定を行った結果、その差は有意であった($\chi^2(2)=7.35, p<.05$)。さらに、個々の2群間で χ^2 検定を行ったところ、退行典型群と退行周辺群では人数の偏りに有意な差は見られなかった。退行典型群と非退行群では人数の偏りは有意であり($\chi^2(1)=4.17, p<.05$)、退行周辺群と非退行群では有意差は見られなかった。

④固執傾向

一つのものに強くこだわることもあるかどうかについて、結果を表6に示す。退行群で固執傾向が多い傾向が若干認められるものの有意差はみられなかった。

表6 こたわり

	ない・時に	よくある
典型群	7 (58.3%)	5 (41.7%)
周辺群	21(70.0%)	9 (30.0%)
非退行	111(74.0%)	39(26.0%)
計	139(72.4%)	53(27.6%)

【まとめ】

今回の検討では、『退行』現象の症状を認めた群と認めなかった群との間で本人の性格行動特徴

に違いが見られた。退行群では、新しい環境に慣れにくく、環境の変化を嫌がるというように、変化に対して柔軟な対応ができにくい傾向が有意に認められた。また、優位性は認められなかったものの、生活リズムの不規則さと固執傾向についても、退行群で多い傾向が認められた。さらに、こうした行動特性は、退行群においては、周辺群よりも典型群でより多く認められる傾向も見られた。

この結果より、これまでの研究班調査で抽出された心身症様症状と関連性の強い行動特性は、他の心理的問題においても関連性があることが示され、これらの行動特性が心理的不適応状況と関連性が高いことの妥当性が示されたと考えられた。

今回の検討は筑波大学人間学類齋藤優子さんの調査によるところが大きく、彼女に深謝いたします。

文献

- 1.宮本信也：性格行動特徴と心身症様症状
厚生省心身障害研究「親子のこころの諸問題に関する研究」平成7年度研究報告書 1996.
- 2.宮本信也：幼児の性格行動特徴と心身症様症状
厚生省心身障害研究「親子のこころの諸問題に関する研究」平成8年度研究報告書 1997.
- 3.横田圭司・川崎葉子：ダウン症の青年期「退行」．安田生命社会事業団研究助成論文集
29(1):114-120,1993.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:これまでの小児心身症研究班の調査で明らかにされた心身症様症状と関連性が強いと考えられる小児の性格行動特性について、病理性の強い群を対象として再検討を行った。対象は、いわゆる『退行現象』が認められた Down 症候群児 200 名である。調査は調査用紙の郵送により行い、保護者に記入を依頼した。4 行動特性について検討を行ったが、2 特性(環境の変化に慣れにくい、環境の変化に対して回避的)が『退行』群で有意に多いという結果であった。また、1 特性(生活リズムが不規則)は有意差は認められなかったが、『退行』群で多い傾向が見られた。今回の結果は、心理的ストレス状態に対して適応障害を起こしやすい特性として、これまで小児心身症研究班で明らかしてきた性格行動特性の妥当性が高いことを示しているものと思われた。